The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パスカルと時間
Author(s)	永瀬, 春男
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 105-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6084
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パスカルと時間

永　瀬　春　男

1

今日『パンセ』という名で呼びならわされている書物は、パスカルの死後に残された多くの断片的草稿を集めたものである。その中心を占めるのは、著者が生前に計画したまま未完に終わったキリスト教護教論のための下書きである。

キリスト教の護教を目的とする書物は当然古くから存在するが、近代フランスにおいては、17 世紀から 18 世紀にかけて特に隆盛を見た。これは自由思想など反宗教的潮流の活発化に対応する事態といえる。パスカルの護教論も、キリスト教の真理性を弁証することで不信仰者を説得し、再び宗教の側へ連れ戻そうという実践的な目的をもって企図されたものである。

パスカルの護教論がどのような構成をもつのかは、長いあいだ不明とされていた。このため編者たちはそれぞれの主観に基づいて断章を配列し、さまざまの『パンセ』を編んできた。著者自身の編集意図が部分的とはいえ明らかにされたのは、漸く 20 世紀中葉にいたってのことである。ラフュマ版（1951 年）はそのめざましい成果であり、以後の編集方向を決定づけた。セリエ版（1976 年）、ル・ゲルン版（1977 年）という重要な二つの『パンセ』も、大筋ではこの流れに沿うものである。これらの諸版が明らかにした点を、本稿の立論に関係する範囲で、概略述べておこう。

パスカルは 1658 年 6 月ころ、キリスト教護教論のために書きためていた長短さまざまの断章の整理編集作業に入った（時期については別の説もある）。大きな紙に書かれ、内容が多岐にわたる断章を鋏で切り離し、次にそれらをテーマ別にまとめると、同じ主題を扱う束ごとに紐で綴じる。自筆原稿の写真版では、その際に紐を通した穴の跡が確認できる紙片がある。こうしてひとまず 27 の紙綴りができた。パスカルはこれら分類ずみの綴り（章に相当する）に「順序」から「結論」に至る表題を付して並べ、目次まで作成している。これがその時点で著者の胸中にあった護教論の構想と考えられる[1)]。ただしこうして分類された断章は、残された草稿全体のおよそ三分の一の分量を占めるにすぎない。

パスカルが残した断章はいずれも未完の断片に過ぎない。数頁にわたる長めの断章がある一方で、簡単なメモの域を出ないものも数多く存在する。それらの下書きは、いずれは大幅な推敲加筆を経て、論理的整合性をもつひとまとまりの論述へと組織されるはずであったろう。

1）断章を含まない表題だけの章が一つあり、これを勘定に入れると全 28 章となる。こうした点について詳しくは、塩川徹也『パスカル『パンセ』を読む』、岩波書店、2001 年を参照。

計画された護教論の第１章は「順序（秩序）」と題され、作品の構成、議論展開の順序、採用すべきスタイル（対話や手紙）などを予告する断章を含んでいる。例えばL.6（B.60[2]）によれば、この作品は二部構成をとり、第１部は「神なき人間の悲惨」を主題とし、第２部は「神とともにある人間の至福」を論ずる予定であった。またL.12（B.187）によれば、護教論はまず宗教が人間をよく知っているゆえに尊重すべきであることを示し、次にそれが真の幸福を約束するゆえに愛すべきであることを示さねばならない。その後に、宗教が真実であることを証明する第３のステップが来る。J. メナールによれば、第２章から第７章まで（「空しさ」「悲惨」「倦怠」「現象の理由」「偉大」「相反」）が第１のステップに、続く三つの章（「気ばらし」「哲学者」「最高善」）が第２のステップに相当する。ここまでが第１部（人間論）であり、それ以降が第２部（宗教論）にあたる[3]。

同時代の護教論は大判数百頁を誇ることも稀ではなく、不信仰者論駁の情熱は否定できないものの、今日ではそのほぼすべてが生命を失ってしまった。刊行当時でさえ、大半の著作は一般読者に訴えかける力をそなえていたか疑わしく、その無味乾燥な文体はむしろ人々を信仰から遠ざけたであろうと皮肉る研究者もいるほどである。これに対して、『パンセ』だけは、時代とキリスト教世界という枠組みを超えて読みつがれてきた。その理由を説明することは簡単ではない。神の存在や霊魂不滅の証明を長々と論じたてる同時代の護教論と異なり、人間の切実な問題から語り始めるモラリストとしての論法、とぎすまされた文体と意表をつく比喩やイメージの駆使などは、その重要な要素であろう。本稿で取りあげる時間論にも、そうした特徴は顕著に認められる。『パンセ』のなかで時間の問題を扱う断章は思いのほか多く、以下で論じるのは、時間をめぐるパスカルの多彩な議論のうちのごく一部にすぎない[4]。

2

本節では、まず第１部人間論を中心に、時間への言及が印象的な二つの議論（虚栄の批判と「気ばらし」の議論）を検討してみよう。

パスカルが人間の「空しさ」のひとつとして批判するものに、「虚栄」、つまり名声や称讃への飽くなき欲求がある。彼によれば、「虚栄心は、あまりに深く人間の心に錨をおろしているので、兵士、従卒、料理人、人足にいたるまで、それぞれにうぬぼれをもち、人から称讃されたいと願うほど」（L.627, B.150）である。あるいは、「我々は全世界から知られたいと思い、我々の死後に生まれてくる人々からさえ知られたいと願うほど思い上がった」（L.120, B.148）存在である。しかもそうした称讃や栄誉が我々の実態に由来するものであるならまだしも、多くの

2）『パンセ』の断章は、初出時にラフュマ版（L）とブランシュヴィック版（B）の番号で指示する。二度目からはＬ版の番号のみを記す場合もある。訳文については、前田陽一・由木康訳、松浪信三郎訳、田辺保訳を参考とした。

3）Jean Mesnard, *Pascal,* Hatier, « Connaissance des Lettres », 5e éd., 1967, p. 150 ; ジャン・メナール『パスカル』、安井源治訳、みすず書房、1971 年、182 頁。

4）パスカルと時間の問題を掘り下げた研究として、次の論考がある。塩川徹也「ひとは今を生きることができるか―パスカルの時間論」『発見術としての学問』、岩波書店、2010 年。

場合、我々は「他人の観念のなかで架空の生活をいとなもうと望み、そのために見せかけばかりに熱中」して、「我々の本当の存在をなおざりにしている」（L.806, B.147）のである。しかしこの欲求の強さは、我々に称讃を与えてくれるべき周囲の人々と、どれだけの期間をともに過ごすかによって左右されるという。

> ただ通りすぎるだけの町なら、そこで尊敬されることなど気にかけない。しかし、しばらく滞在することになると、気にかける。それにはどのくらいの時が必要なのだろう。我々の空しい、取るに足りない存続期間に釣り合った（proportionné）ひと時。（L.31, B.149）

虚栄心がいかに強かろうと、「ただ通りすぎるだけの町」でなら、人は尊敬を求めたりはしない。しかし、しばらく滞在するとなれば、「いっしょにいる人たちから尊敬されたいという欲望」（L.628, B.153）が目ざめてくるというのである。

ここでは複数の時間が対比されていることに注意したい。第1に、旅先の町で過ごすわずかの時間。第2に、その町に逗留することになった場合の期間。第3に、「我々の空しい、取るに足りない存続期間」、つまり人間が地上で送る一生。この五十年なり百年なりの生が「空しく、取るに足りない」と評されるのは、「私の生涯の短い期間が、その前と後との永遠のなかに呑み込まれ」（L.68, B.205）てしまうからである。人間が占める空間の広がりが、全自然の「無限に比しては無」（L.199, B.72）であるように、人間が生きる時間も永遠の前では無に等しくなってしまう。つまりこの断章の背後には永遠という第4の時が暗黙のうちに想定されており、都合四種類の時間が対比されていることになろう。人間の地上での生涯と旅先の町での滞在を類比的なものとして捉え、両者のあいだにある種の均衡（proportion）を想定しうるのは、この対比の背後に、比較を絶するほど大きな時とのあいだの不均衡（disproportion）が潜んでいるからである。「無限を目の前におけば、有限なものはすべて相等しい」（L.199）のであり、百年にわたる生涯であろうと、結局は「一日で過ぎていく客の思い出」（L.68、『智慧の書』からの引用）のごときものにすぎない。そうであるなら、この世での名声や栄誉を気にかけることと、つかの間の滞在先で評判を気にすることとのあいだに、どれほどの相違があるだろうか。にもかかわらず、人はそれを気にかけ、「他人の観念のなかで」「たえず自分の架空の存在を飾り、それを維持しようと努め」（L.806）ずにはいられない。それは「通りすぎる町」で尊敬を得ようとするのと同じように、無意味で空しいことなのである。

このように断章L.31では、町を通過するだけの期間、一定の滞在期間、人間の生涯、さらには永遠という異なる時が対比され、それら相互のあいだにある種の類比関係が想定されている。これは「二つの無限」の断章（L.199）に見られる空間の際限なく続く入れ子構造と、そうした空間相互の類比性（ダニのなかに宇宙を見、その宇宙を辿りつくしてついにはまたダニを見出し、「そしてこれらのダニのなかに、最初のダニが提供したものを再び見出すであろう」）という考え方に類

似しており、パスカルは時間をめぐっても同じ発想法を見せる。例えば、進歩の思想の宣言として著名な小品『真空論序言断章』では、人類全体の歩みを、知識と経験を絶えず積み重ねていく一人の人間の生涯に擬している。人類全体にも人の一生と同じような幼時期から老年期へ至る歩みが想定されているのである[5)]。それは円錐の任意の箇所を平面で切断した場合にできる複数の曲線が、長さは異なっても互いに対応関係をもつのと類比的でもある。

次に、印象的な時間への言及が見られる第2のケースとして、「気ばらし」の議論を見てみよう。パスカルによれば、「人間は死、悲惨、無知を癒すことができなかったので、幸福になるために、それらのことについて考えないようにした」(L.133, B.168)。「気ばらし」とは、そうした不幸な存在条件から「心をそらせ、気をまぎらせてくれる喧騒」(L.136)のことである。

> ほんの数ヶ月前に一人息子を失い、訴訟や争いごとで打ちひしがれ、つい今朝がたもあんなにくよくよしていたこの男が、今はもうそれを考えていないのは、どうしたわけだろう。驚くには及ばない。六時間前から犬どもに猛烈に追わせている猪が、どこを通るだろうかと夢中になって見ているからである。(L.136, B.139)

人間は、いかに悲しみに満ちているときでも、「気ばらし」へと引き入れてもらいさえすればその時間のあいだだけは幸福になれるし、反対に「気ばらし」がなければ、王侯であろうとたちまち不幸におそわれてしまう。また大蔵卿、大法官、高等法院長といった顕職に就くことの意味とは、「朝早くから各方面の人々が押しかけてきて、一日のうち一時間も自己自身のことを考える暇がないような境遇にあること」(同)にほかならない。このように我々は、喧騒のうちに時の経過を忘れ、現在の不幸をやり過ごそうとする。我々が現在から遁走を図るのは、「現在が、多くの場合我々を苦しめる」(L.47, B.172)からであり、「気ばらし」に熱中すればするほど、時間は早く過ぎ去って不幸を忘れさせてくれる[6)]。このように見てくれば、「気ばらし」の議論が人間のもつ時間意識と深いつながりを有することが納得されよう。

もちろん「気ばらし」は、生の本来的なあり方ではなく、本当の幸福はおだやかな休息のうちにしかないことを、狩猟や賭け事に時を忘れている当人もひそかに感じ取っている。しかし実際には、気ばらしのない休息はたちまち堪えがたい「倦怠」を生み、彼は再び気ばらしを求めて喧騒の生活へと立ちもどってしまう。こうして猪を待ちうける「六時間」、訪問者に割く面会の一時間が積み重なり、い

5)「かくも長い世紀の流れの間の、人類の連なりの全体は、つねに存続し、絶えず学んでいく、同じひとりの人間とみなさなければならない。」Pascal, *Œuvres complètes,* éd. J. Mesnard, Desclée de Brouver, t. II, 1970, p. 782 ;『メナール版 パスカル全集』、白水社、第1巻、1993年、171頁、赤木昭三訳。

6)「一人は言う、「二時間たった」と。他の一人は言う、「四十五分しかたたない」と。私は時計を見て、一人に言う、「君は退屈している」と。そして他の一人に言う、「君は時間のたつのを忘れている」と。なぜなら、実は一時間半たっているからである。」(L.534, B.5)

つの間にか「一生が流れ去る」（L.136）のである。人間の生涯は長い気ばらしの時間とつかの間の安息の時間の際限のない交替として現象し、真の生き方は忘却されたまま省みられることがない。

以上、虚栄心の空しさと気ばらしの議論を手がかりに、パスカルにおける時間論の一端を検討してみた。護教論第2部の初めで、著者は探求の必要性を力説することになるが、そこでも上に見た時間論を踏まえて、議論が展開するように思われる。パスカルによれば「牢獄は恐るべき刑罰」（同）であるが、それは囚人から「気ばらし」を強制的に奪い取り、いや応なく自らの悲惨な条件に直面させるからである。第2部では、護教論者は人間一般を死刑囚に譬え、その前に独特の相貌をもって現れる時間のもとで、生を見つめなおすよう促すことになろう。

3

護教論のプランにおいて、第2部はキリスト教の証明、すなわち「修復者が存在することを、聖書によって」（L.6）立証することを眼目としている。ただしパスカルは宗教の歴史的な「証明」に先立ち、幾つかの導入的な章を設けており、これら導入部は、いずれもパスカル的護教論の独自性に関わる重要な役割を担っている。第12章「始まり」はそのひとつであり、その中心主題は、探求（真理を求めること、神を求めること）の必要性・合理性を説得することにある。つまり、キリスト教の教義がまったくの迷妄ではないこと、少なくとも探求を試みるだけの価値があることを示そうとするのである。

パスカルは1658年の分類綴り編集作業の後、さらに多くの断章を書き継ぐかたわら、分類ずみの章に収められた複数の断章を連ね、敷衍詳述する展開作業に着手したと思われる。この試みも未完成のまま終わったものの、幾つかの長い断章にその痕跡を留めており、特に問題の第12章に関わる二種の改稿作業が眼を引く。

ひとつは「賭」の断章（L.418, B.233）を中心とするグループで、第1写本が伝える未分類綴り第2束に収められている。もうひとつは、同じく第3束に収められたL.427（B.194）とL.428（B.195）である[7)]。この二つの束は、第2写本においても連続していることから、執筆時期とテーマにおいて近い関係にあると推定できる。内容面の検討からは、二つの束が、第1章「順序」で予告されている「神を求めるべきであるという手紙」、「障碍を除くことという手紙」、あるいは「機械についての論述」（L.4, B.184 ; L.5, B.247 ; L.7, B.248 ; L.11, B.246など）の試みに相当し、それぞれ第12章の発展形態とみなせるのである。以下ではこの第12章と二つの束に属す断章を中心に検討を加えてみる。

注目すべきは、これらの断章において、時間への言及が目立って多い事実である。つまり探求の必要性を説くにあたり、パスカルは彼独自の時間論に重要な役割を担わせている。次の引用が簡潔に表現しているように、その時間論は有限な生涯、それを区切る死、死後に待つ永遠という三つの契機を含んでいる。

7）未分類紙綴りの束の順番は、ラフュマ版が依拠する第1写本によるもの。第2写本では順番が異なる。

最後の幕は血で汚される。劇の他の場面がどんなに美しくても同じだ。ついには人々が頭の上に土を投げかけ、それで永久におしまいである。(L.165, B.210)

この世で生きる時間は一瞬にすぎず、死の状態は、その性質がどんなものであるにせよ、永遠であるということは疑う余地がないからである。(L.428, B.195)

すべての人間を例外なく待ちうけているこの死は、すぐ間近に迫っているかもしれない。「我々が明日の日を見ることは確実ではないが、明日の日を見ないかもしれないことは確実にありうる」(L.577, B.234) ことなのである。死が常に身近に潜んでいる事実を強調することは、パスカルの人間理解の基本であるとともに、読者に態度変更を迫るための有力な根拠にもなる。

同じく第12章に属す一断章において、パスカルはまず「分け前。次のような種々の場合を想定し、それによってこの世でそれぞれ違った生き方をしなければならない」と述べた後、次のように記している。

1、この世にいつまでもいられる場合。
5、そこに長くはいないことが確かであり、一時間いられるかどうかも不確かである場合。
この最後の想定が我々の場合である。(L.154, B.237)

この断章は、初稿段階では、1と5のあいだに、さらに三つの想定(「2、この世にいつまでもいられるかどうか不確かな場合。3、そこにいつまでもいられないことは確かであるが、長いあいだいることが確かである場合。4、そこにいつまでもいられないことが確かであって、しかも長いあいだいられるかどうか不確かな場合」)が書き込まれていた。ところがパスカルは、最終的に2～4の想定を抹消し、その上に「誤り」と書き込んだのである。先に見たように、人間の短い一生は、その前後に拡がる永遠のなかに呑み込まれてしまう(L.68)こと、「有限は無限の前で消滅し、無そのものに化す」(L.418)ことを知る著者にとって、生涯の時間の相対的な長短など意味をもたず、2～4の想定はいたずらに煩瑣な区別にすぎないと思われたのである。我々の生命とは「この世で最もはかないもの」(L.152, B.213)であり、死は「我々を一瞬ごとに脅かし」(L.427)続けている。結局、永世(想定1)か不可避の死(想定5)かという二項を残せば十分となる。その上で、第5のケースこそ我々の運命であることを示していわば退路を断ち、「この世での違った生き方」の選択へと読者を導くのである。こういう条件のもとでなら、「人は宏壮な家を建てたりするであろうか。ためらうことなく真理を求めるであろう」(L.151, B.211)と。

このように見てくると、人間の条件を牢獄の死刑囚になぞらえるのも、あながち極端な比喩とばかりはいえなくなろう。人はみな死刑囚であり、「何人かが毎日他の人たちの目の前で殺されていく。残った者は、自分たちの運命もその仲間たちと同じであることを悟り、悲しみと絶望のうちに互いに顔を見合わせながら、自分の番がくるのを待っている」(L.434, B.199)。これは救いのない陰惨なイメージに映るが、護教論者の真意は、むしろ次の断章に読みとれる。時間の活用を重要な手がかりとして、脱却への道が示唆されるからである。

> 一人の男が牢獄にいて、自分の宣告が下されたかどうかを知らずにいる。それを知るにはあと一時間の余裕しかないが、もし宣告の下されたことを彼が知るならば、一時間以内に宣告を取消してもらうことができる。そういうような場合、その一時間を、宣告が下されたかどうかを知るために用いないで、ピケ遊びをするのに使うとしたら、それは自然に反することである。(L.163, B.200)

残された一時間を有効に用いて尋ねるべきは、「霊魂が可死であるか不可死であるか」という問題であり、これを知ることは「全生涯にかかわること」(L.164, B.218)である。もし漫然と時を送るなら、「我々を一瞬ごとに脅かしている死は、遠からずして、永遠の滅亡または永遠の不幸という恐るべき必然性のなかに、いや応なしに我々を投げこむであろう」(L.427)から。ところが実際にはそうした無反省な生き方こそ世にありふれており、「我々は断崖が見えないように何かで眼をおおい、それから平然としてその中へ飛びこむ」(L.166, B.183)のである。気ばらしは、この眼をおおう手立ての代表といえよう。

護教論者が求めるのは、こうした怠惰な生き方からの脱却、態度変更である。残された一時間をトランプのゲームや「コペルニクス説の究明」(L.164)に割くのではなく、より重要で切実な真理の探求に用いるべきであるならば、もっと長い時間についても同じ理屈が当てはまることになると彼は述べる。

> もし一週間の生涯をささげるべきであるならば、百年でもささげるべきである。(L.159, B.204[8])

第2節で検討したパスカルの発想法(時間、空間における類比)がここにも認められる。先には永遠との比較のもとに、人間が地上で送る生涯が旅先での逗留期間に擬され、究極的にはそれが「一日の客の思い出」と異ならないことが示されていた。ここでは時間の比較がいわば逆方向に、拡大方向にたどられている。我々が一時間先、一週間先に地上にいられるかどうか不確かである以上、死刑囚が探求にささげる一時間は、我々の一週間あるいは十年に匹敵し、そしてつきつめれ

8)同じくL.293では、「もし一週間をささげるべきであるならば、全生涯をささげるべきである」。

ば全生涯にも相当するのである。

人間の生を処刑直前の一時間に極限化し、生き方の変更を迫るこうした論法が説得の正攻法であるとすれば、「賭」の議論はその補強策、いわば搦め手から迫る論法といえよう。この議論が、第12章「始まり」の主題の特異な展開であることは、この章に属す幾つかの断章中に「分け前」という表現が見えることからもわかる。「分け前」とは、賭が中断された場合に、賭け手のあいだでなされる賭金の正当な配分のことであり、パスカルはその配分比率を数学的に確定したのであった。また、本節の初めに、有限な生涯、それを区切る死、死後に待つ永遠という三つの契機について触れたが、賭の議論もこの三契機を踏まえて展開される。次の断章は、そうした議論の要点を簡潔に言い表している。

> 分け前によって、君は当然、真理を追求することに心を労すべきである。なぜなら、真の本原を拝さずに死ぬなら、君は滅びるからである。(L.158, B.236)

賭の議論の目指すところは、真理の追求に踏み出すことが、「証明済みの分け前の規則によって」(L.577, B.234) 理にかなっていることを示し、それをせず無為に日を送るなら滅びは免れないと警告するところにある。

問題の断章L.418 (B.233) によれば、およそ賭をする者は誰でも、「不確実に得るために、確実に賭ける」のであり、それは「決して理性に反することではない」。しかも神ありに賭けるほうが、「分け前の規則」によって絶対的に有利なのである。それでも逡巡するならば、それは情欲のせいであるから、情欲を減らし、あたかも「信じているかのように万事を行ない」、「聖水を受け、ミサを唱えてもらう」ことから始めるのがよいだろう。そのように身体という機械を習慣づけることで、人は信仰の入り口にまで導かれるであろう。賭の断章は、数学的議論 (損得をめぐる確率計算) を除けば、およそ以上のように要約できる。

死刑囚の比喩も「賭」の議論も、探求を促すための二つの手段であり、時間論を介してつながる車の両輪のごときものである。それをいっそう明瞭に示す断章が、「神を求めるように仕向けるための手紙」の下書きにあたるL.427およびL.428の二つである。やや長くなるが、後者の一部を引いてみよう。護教論者は「キリスト教の証拠に入る前に、私は、人間にとってかくも重要な、かくも切実な問題について、人々が真理を求めることに無関心で暮らしているのが、いかに不正なことであるかを、指摘する必要があると思う」と語り出し、次のように続けていく。

> なぜなら、この世の生の時間は一瞬にすぎないということ、死の状態は、それがいかなる性質のものであるにせよ、永遠であるということ、これは疑う余地がないからである。それゆえ、いっさいの我々の行動と思想は、この永遠の状態の如何によって、異なった道をとらなければならないので、我々の

究極の目的たるべきこの点を見きわめることによって歩みを律しないかぎり、我々は分別ある歩みを一歩も踏み出せないほどである。

[…] そこで我々は、人生のこの究極目的については何も考えずに暮らしている人々、反省も不安もなくただ自分たちの性向と快楽の誘うままになっている人々、また永遠から思いをそらすことによって永遠を消滅させることができるかのように、この瞬間だけ幸福でありさえすればいいと考えている人々のことを、以上の点にもとづいて判断してもらいたい。

しかしながら、かかる永遠は存在する。永遠の扉を開く死は、彼らをたえずおびやかしているが、それはやがてあやまつことなく、彼らを永遠の消滅または永遠の不幸という恐るべき必然性のなかに投げいれるにちがいない。しかも彼らは、それら永遠のうちのいずれが、自分たちのために永劫に用意されているかを知らない。(L.428, B.195)

この世の生は一瞬であり、死の状態は永遠であること、この永遠がいかなる性質のものになるかということほど重大な問題はないことが、熱をこめて語られている。これを読むと、「賭」を含め、探求の必要性の議論が、有限の生、死、死後の永遠という三つの契機を含む時間論に深く根ざしていることが理解できる。

時間を有益な探求に用いるかわりに「ピケ遊び」に興じる者たち、死後に「何が起こるはずなのかなど考えたりせず、一生のすべての日々を過ごすべきである」(L.427) と公言する者たちに、護教論者はきわめて厳しい批判を投げつける。「彼ら自身に、彼らの永遠性に、彼らの全存在にかかわる問題についての、このような怠慢は、[…] 私に腹を立てさせる。私を呆れさせ、恐れさせる。私から見ると、それは奇怪なこと」(同) だというのである。反対に、たとえまだ真理を見出さずとも、「うめきつつ求める人々」(L.405, B.421) に対しては寛容であり、同情の念とともに説得の声を強めるのである。

4

『真空論序言断章』において、進歩の思想の提唱者パスカルは、幾何学や算術、自然学や医学など、「実験と推論に委ねられているすべての学問は、完全になるためには、増し加えられなければなら」ず、我々現代人は、古代人から受けついだ学問的成果を、「受け取ったときよりも完成された状態で、あとに来る人たちに残すであろう」と述べ、さらに次のように続けている。

これらの学問の完成は、時間と労力によるのであるから、我々の労力と時間のみによって得られるものは、我々の労力と切り離し、古代人の労力のみによって得られたものより少ないとはいえ、しかしそれにもかかわらず、両者をともに合わせるならば、明らかに、それらを別々にしたものよりも大きな成果が得られるにちがいないのである[9)]。

9) Pascal, *op. cit.*, t. II, p. 779 ; 前掲邦訳、第 1 巻、168 頁。

これはデカルトの『方法序説』第 6 部に見られる次のような箇所とも共通する思想である。

> 後の者は先の者が終えたところからはじめることになり、かく多くの人の生涯と努力をあわせることによって、我々は皆いっしょに、めいめいがひとりで達しうるよりもはるか遠くまで進むことになるであろう[10]。

どちらの引用においても、現代の人間は、先人の労苦と時間を受けつぎ、自らの成果を加えて後代へ手渡すことにより、科学の進歩を形成していく。そこでは一個人の死は、いわば人類全体の歩みのうちに統合され乗り越えられている。これは死が人間的時間に絶対的断絶をもたらす護教論の時間把握とはきわめて対照的な考え方といえる。護教論者パスカルは「外的な学問の空しさ」(L.23, B.67) を告白し、コペルニクス説の真偽の究明を重大事とみなさなかった。むしろ彼にとっては、そうした「外的な学問」自体が、「気ばらし」になりかねないのである (L.136)。

一方、デカルトにとっては、こうした学問的真理の探求こそ重大な仕事であった。特に、その名も『真理の探求』と題する未完の著述は、教育的意図を明確に打ち出し、時間を無益な事柄に費やさずに善用して、真理の探究に努めるように読者を慫慂する。人が一生になすべきことは数多くあり、地上での寿命は限られている。だから生涯の時間を適切に計量し、その最良の部分を、良き行ないのためにあてるべきなのである[11]。この書は、貴重な生涯の時間への考慮を、探求のための重要な動機づけとする点において、パスカルと重なる部分がある。しかし二人の著者の論調は対照的でもあり、デカルトには『パンセ』におけるパスカルのような切迫感は存在しない。そこには人間を死刑囚になぞらえるような極限的な比喩も、死後の状態の永遠性に対する恐れも見られないのである。

本稿では『パンセ』の時間論のほんの一端に触れたにすぎない。ここで論ずる余裕のなかったキリスト教の論証部分における時間論（歴史、宗教の「永続性」など）の検討は、別の機会に譲りたい[12]。

（岡山大学教授）

10）Descartes, *Œuvres philosophiques,* éd. F. Alquié, Garnier Frères, t. I, 1963, p. 635 ;『方法序説・情念論』、野田又夫訳、中公文庫、1980 年、76 頁。
11）*Ibid.,* t. II, 1967, pp. 1105-1107 ;『デカルト著作集』、白水社、第 4 巻、1973 年、299-301 頁。
12）歴史的時間や「永続性」の問題について、Gérard Ferreyrolles, *Pascal et la raison du politique,* PUF, 1984, 特に Chap. VI : « Politique et histoire » を参照。

［付記］本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C）（2），22520316）による研究成果の一部である。